

聴覚障害児童に対する比喩の系統的な指導に向けた検討

—— 小学校国語科教科書における比喩の出現傾向に関する検討を通して ——

金澤 知衿・谷本 忠明

『特別支援教育実践センター研究紀要』 第19号 別刷

広島大学大学院人間社会科学研究科附属特別支援教育実践センター

The Bulletin of the Center for Special Needs Education Research and Practice No.19

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

March 2021

<資 料>

聴覚障害児童に対する比喩の系統的な指導に向けた検討

— 小学校国語科教科書における比喩の出現傾向に関する検討を通して —

金澤 知衿*・谷本 忠明**

聴覚障害児童生徒の日本語習得における困難な表現の1つに比喩表現がある。特に国語科教科書では様々な比喩表現が用いられており、その指導に向けた対応が必要である。本研究では、国語科教科書に出てくる多様な比喩表現を低学年段階から系統的に指導するための教材を作成することを視野に入れ、平成30（2018）年度版小学校国語科教科書（5社）1年から6年の「読み」単元を対象として、出現する比喩の種類と頻度について検討した。その結果、直喩が最も多く出現し、次いで慣用句、擬人法、隠喩となっていた。また、直喩では、知覚的比喩が概念的比喩の約2倍出現していた。この結果を元に、比喩の指導順序を設け、聴覚障害児童が低学年から学習できるための教材として、直喩、隠喩、擬人法の意味と用法について学習をするための低学年用、中学年用、高学年用のワークブック（試案）を作成し、特別支援学校（聴覚障害）教師からの改善意見を踏まえて、改訂版を作成した。

キーワード：聴覚障害児童 比喩表現 国語科教科書 指導順序 比喩学習教材

I. 問題と目的

これまで聴覚障害児童生徒における言語（読み書き）には様々な特徴が見られることが指摘されている（我妻, 2003；井原・草薙・都築, 1982；木島・菅原・岡野, 2011；坂本, 2009；澤, 2004；脇中, 2009；四日市, 2009）が、その内容については類似しており、彼らが日本語習得において直面する困難に対する手立てが常に求められてきたといえる。近年、PISA（Programme for International Student Assessment：生徒の学習到達度調査）における「読解力（読解リテラシー）」（経済協力開発機構（OECD）, 2016）の考え方が学校教育における言語能力の育成の在り方にも関わっている。補足ながら、PISA2018年調査では、読解力の定義は一部変更され、それまでの「書かれたテキスト」の「書かれた」が削除され、「評価し」の語が加えられている（国立教育政策研究所, 2019）。上記の考え方は特別支援学校教育においても例外ではなく、特別支援学校小学部学習指導要領解説（文部科学省 [2018c] 255）においても、「学習の基盤となる資質・能力として言語能力を育成することを示していることを受けて、教育課程の編成に当たり、各学校に

おいて学校生活全体における言語環境を整えるとともに、言語能力を育成する中核的な教科である国語科を要として、各教科等の特質に応じた言語環境を充実すること」とされている。

こうした状況の中で、特別支援学校（聴覚障害）で採択されている教科用図書（以下、教科書とする。）について、ウェブ上で公開されているいくつかの教育委員会の情報を見る限りにおいては、いわゆる検定済教科書が採択される形が一般的であることが窺える。学習指導要領において明記されているように、教科の学習においては、これまで以上に国語科の学習が重要になってくると考えられる。その際、聴覚障害教育においてまず求められることは、教科書に書かれている文や文章の内容（意味）を捉えることであるといえよう。それができるために求められる言語事項は多岐にわたると思われるが、まずは書かれた事の意味を捉えることができることを目指して、考えられる言語事項について系統的、継続的に指導を行う必要がある。小学校学習指導要領（文部科学省 [2018a] 34）においては、国語科の指導事項が挙げられているが、その中の1つとして比喩に関する表現の指導がある。これは、第2章「第1節国語」の「第2 各学年の目標及び内容」の「第5学年及び第6学年」に示されている。指導内容のうち、「知識及び技能」の「(1) 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身につけることができ

* 鳥取県立白兔養護学校

** 広島大学大学院人間社会科学研究所

るよう指導する。」として挙げられている項目の「ク」に「比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと。」と述べられている。これは、前回の学習指導要領の改訂において新たに加えられた(奥田, 2012)ものである。

これについて、学習指導要領解説国語編(文部科学省 [2018b] 122)では、「比喩とは、あるものを別のものにたとえて表現することである。『まるで～のようだ』などのようにたとえであることを示す語句を伴う直喩や、そのような語句を用いない隠喩などがある。」と定義されていることに加えて、次のように述べられている。「これらの表現の工夫は、第1学年及び第2学年の児童が読んだり書いたりする文章中にも頻繁に見られる。第5学年及び第6学年においては、これまでに触れてきたこうした表現の工夫への気付きをまとめて整理することが求められる」。例えば、小学校低学年の教科書の物語文である「スイミー」には、比喩表現が巧みに使われていることを柴田(2003)は指摘している。このことを踏まえれば、比喩表現は児童が国語科の学習で小学校低学年から触れるものであり、高学年での学習に向けて、その指導をいかに系統的、継続的に行っていくかについての検討が求められると言える。

比喩の理解について、聴覚障害児童生徒と小学生とを対象に実験的に検討した澤(1999)によれば、「聴覚障害児は中学部の段階で健聴児の小学4年生とほぼ同等」であるとしている。また、知覚的比喩よりも概念的比喩の理解が一般的に困難とされているが、「聴覚障害児における問題は学年の進行に伴って概念的比喩の理解が向上しにくいことにある」とし、その要因として、聴覚障害児において、「事物や事象に関する意味的知識やその活用力の発達が遅滞することに起因している」ことを指摘している。また、澤が用いた知覚的比喩、概念的比喩に加えて、イデオム(慣用表現)文を用いて、中学部から高等部までの聴覚障害生徒を対象とした理解度の検討を吉岡・種村(1998)が行っている。聞こえる生徒との直接比較ではないが、そこでは概念的比喩の理解が遅れていることが示されている。澤(1999)では、対照群として小学校1年から6年までの児童が設定され、比喩の理解得点は、特に小1から小4にかけて、得点の伸びが大きかったことが示されている。このことも、比喩の理解を視野に入れた早期からの基盤作りの必要性を示唆していると捉えることができる。これに関連して、Trezek, Wang, and Paul (2011)は、比喩表現に用いられている言語を「figurative language」として従来の研究を

概観し、「未熟な読み手、とくに3年生から4年生レベルで伸びが止まっている場合は、読み手は、読み物における比喩言語の理解に困難を有する。」(四日市・鄭・澤監訳 [2015] 192)としている。

聴覚障害児にとって、比喩の理解の難しさにつながる要因はいくつか考えられるであろうが、その1つとして考えられることは、比喩が「あるものを別のものにたとえ」(文部科学省, 2018b)ていることにある。つまり比喩によっては、「比喩に使われた語は、本来の意味に加えて、臨時的な意味を持つ」(佐久間・加藤・町田, 2004) ことがあり、比喩を理解しようとするれば、常にたとえた言葉の意味を、たとえられている元の言葉の意味や内容と結びつけながら捉えていくことが必要になる。意味が固定されるほど馴染みのある比喩表現もあるが、国語科教科書に出てくる比喩表現は、作者の意図がそこに含まれていることも多く、比喩表現に用いられている言葉を手がかりとして、そこに含まれる意味を理解する作業が欠かせない。加えて、比喩表現にはいくつかの種類(用法)があり、それぞれにたとえ方の違いがあることも理解を難しくする要因と考えられる。比喩の種類については、中村(1977)が詳しくまとめており、修辞学上で扱われてきた比喩を、直喩、隠喩、諷喩、活喩、提喩、換喩、引喩、張喩、声喩、字喩、詞喩、類喩として紹介しているが、実際に分類しようとすると、分類上の難しさが生じることも指摘している。

こうしたことから、聴覚障害児童に対する比喩指導を考える際には、聞こえる児童が小学校低学年までに絵本などで比喩表現に触れるほどの経験はしていない場合が一般的であると予想されること、教科書を中心に進められる国語科学習における比喩表現は低学年から見られていること、そこで用いられている比喩表現も、いくつかの種類があることなどを踏まえておく必要があるであろう。本研究では、学習指導要領において国語科学習の重要性が指摘されていることを視野に入れ、国語科教科書で用いられている比喩表現の種類や出現頻度の傾向について検討し、低学年から高学年にかけて系統的に指導していくための視点を得るとともに、それに基づいた比喩指導教材を作成することを目的とした。

II. 予備的検討

1. 目的

上述した中村(1977)によれば、比喩表現には多くの種類がある。しかし、小学校段階でそれらすべてを

学習する必要性は少ないと考えられる。学習上必要な比喩としてどのようなものがあるのかについて、例えば、聴覚障害児童高学年以上を対象としていると思われる教材（前田・堀谷・遠藤・太田，2017）では、比喩法として「直喩」「暗喩」「擬人法」が取り上げられている。また、奥田（2012）による高学年の国語科教科書における比喩表現の分析では、「直喩」「隠喩」「換喩」が挙げられている。また、杉本・岩淵（1990）の比喩の解説では、「直喩」「隠喩」「換喩」「提喩」が挙げられている。これらを踏まえれば、学習上必要となる基本的な比喩としては、「直喩」「隠喩」「換喩」が考えられる。「換喩」は中村（1977）では、「主として主体と属性との関係が認められる場あい」とされ、杉本ら（1990）では「類似性での比較ではなく、XとYとが相似、近似性という縁故をもつ点での比喩」とされている。奥田（2012）では、「たとえられる対象とたとえになる対象とが、空間的、時間的に隣接の関係にあり、また、たとえになる対象の基本的意味が転化している」と述べられ、「頭をはなれません」、「口が悪い」などがその例として紹介されている。しかし、中村（1977）は、比喩の種類について、「こういう技法があるということ説くものであり、ある表現がどの技法に属するかを説くものではない」とも述べており、実際にはある程度明確に区別できるものとしては直喩の「～のようだ」のような表現上の形を手がかりにするものや、活喩における擬人法などに限られるのではないかと考えられる。また、ことわざや慣用句も比喩の1つとして扱われるが、銭（2019）では、ことわざを引喩あるいは換喩として分類している。慣用句についても、実際には様々な比喩用法が用いられていると推測される。さらに、澤（1999）では、上述したように、知覚的な観点を含む比喩（知覚的比喩）と概念的な観点を含む比喩（概念的比喩）について、聴覚障害児では両者の間に理解の差が見られることも示されている。

以上のことから、本研究においては、比喩表現の分類を行うに当たっての分類基準として Table 1 のように直喩、隠喩、擬人法、慣用句の4つを設定した。なお、この分類基準は、聴覚障害児童に比喩の指導を行うに当たって必要となると考えられる比喩表現を想定して設けたものであり、必ずしも国語学的な観点に沿ったものではない。そのため、擬人法は広義の隠喩として扱い、慣用句については、直喩、隠喩、換喩にまたがる多様な使用が見られること（宮地，1982；舛山，1997；阪田，1990；山梨，1988；呉，2016）から、

隠喩には含めず、別の扱いとした。また、直喩、隠喩においては澤（1999）に示されているような、知覚的比喩と概念的比喩は区別する必要があると考えられたため、両者をさらに2つに分けた。

予備的検討では、この分類基準に従い、平成29年に現在の学習指導要領が告示される1つ前の学習指導要領が全面实施された初年度である、平成23年度版の国語科教科書（光村図書出版）を対象に、教科書内のどの単元において比喩が多く用いられているかを分析し、どの単元を扱うことで出現傾向を見ることができるときの作業上の手がかりを得ることを目的とした。

Table 1 本研究で用いた比喩の分類基準

直 喩	隠喩（広義）		慣用句
	隠喩（狭義）	擬人法	
知覚的	知覚的		
概念的	概念的		

* 谷本・金澤（2020）を一部改変した。

2. 方法

（1）分析対象：光村図書出版平成23年度版検定済国語科教科書、第1学年～第6学年（以下、1年、6年などと表記する。）用全10冊を対象とした。

（2）分析手順：① まず最初に、比喩が含まれる単元について検討するため、比喩表現が最も多く用いられていると考えられる6年の教科書を取り上げ、教科書の目次と「学習の見通し」に基づき、「読む」「書く」「話す・聞く」の各領域に該当する部分（単元）を抽出した。② ①に該当しない箇所は、「単元外」（以下、単元外を含めた分類基準を『領域』とする。）として扱うこととした。ここに含まれるのは、漢字や敬語などの国語的活動を促すページや、読み単元の後につけられている補助的なページ、「資料」とされているページである。なお、この基準では、「本は友達」のページは単元外に該当するが、そこに含まれる「森へ」は活動につなげるための読み教材として設定されているため、「読み」の領域に分類した。③ 本文の引用部分等、本文と重複する部分や付録は除外した。④ 各領域のページ数が、教科書本文のページ数に占める割合を求めた。⑤ 各領域に見られている比喩を Table 1 に従って抽出、集計した。慣用句については、東京書籍編集部（2014）を参考にして抽出した。なお、知覚的比喩と概念的比喩の分類については筆者らが行い、分類結果が異なった場合には協議を

行って分類を決めた。⑥ 6年用教科書の結果に基づき、1年から5年までの教科書についても、比喩表現を抽出した。

3. 結果と考察

6年教科書の総ページ数に占める各領域の割合と、そこで見られていた比喩数について Table 2 に示した。ページ数のほとんどは「読み」単元と「単元外」に該当しており、比喩もほぼすべてがこの2つの領域で用いられていることが示された。このことから、「読み」と「単元外」を調べることで比喩の出現傾向を明らかにすることができるものと考えられた。

Table 2 各領域のページ数の内訳 (%) と出現比喩数の内訳 (%)

領域等	読み	書く	聞く・話す	単元外	計
ページ内訳 (ページ数)	40.2 (84)	9.6 (20)	3.8 (8)	46.4 (97)	100.0 (209)
比喩数内訳 (比喩数)	78.7 (63)	1.3 (1)	—	20.0 (16)	100.0 (80)

次に、出現した比喩を Table 1 に従って分類した。なお、直喩を知覚的直喩と概念的直喩に分類するに当たり、文脈上両者の意味が含まれる例（例えば、「魚のよう」は魚の形状を表しているとも、魚の生態上の特徴を抽象的に表しているとも解釈できる。）があり、筆者らで前後の文脈などを手がかりに協議したが、いずれか一方に分類できなかった。そのため、こうした例については、知覚的直喩と概念的直喩の両方に分類することとした。その結果、比喩総数は4増えて84となった。比喩の種類は、59.5% (50) が直喩、9.5% (8) が隠喩、13.1% (11) が擬人法、17.9% (15) が慣用句であった。さらに、直喩については、知覚的直喩が24、概念的直喩が23とほぼ同数であり、隠喩については、知覚的隠喩が6、概念的隠喩が2であった。

6年用教科書の結果から、「読み」と「単元外」にほぼすべての比喩が出現していることが示されたため、1年～5年については、2つの領域を対象に比喩の抽出と分類を行った。その結果、比喩数は、1年では11、2年では33、3年で22、4年で38、5年で35、6年で84、計223と、低学年から高学年にかけて増加しており、特に、6年で多く用いられていることが示された。比喩の種類で見ると、直喩は全体の58.7% (131)、次いで、擬人法と慣用句がそれぞれ15.7% (35)、隠喩が9.9% (22) であった。直喩の内訳は、知覚的直喩が直喩全体の59.5% (78) であったが、概念的直喩も少なくない (40.5% (53)) ことが示された。隠

喩 (22) では、知覚的比喩が14で、概念的比喩8よりも多かった。また、知覚的比喩は、ほとんどが視覚的な状態 (大きさ、形、色、動き) をたとえたものであったが、聴覚的・触覚的な状態のたとえも見られた。概念的比喩について、その内容を性質・機能 (例：笑顔は人と人を結ぶ橋)、程度 (例：年月はとぶように過ぎる)、感情 (例：森の動物になったような気持ち)、非現実 (例：声が空から降ってきた) に分類した結果、約半数が性質・機能についてのたとえであり、次いで約3割が感情についてのたとえとなっていた。

さらに、「単元外」で出現する比喩の内容を「読み」で出現する比喩と比較すると、出現数自体は多くなく、種類も「単元外」のみで出現しているものはなかった。個々の比喩で使われている語は異なるものの、種類で見れば、ある学年で「単元外」で出現している比喩は、同じ学年の「読み」で出現する比喩の種類の中に含まれている事が示された。

以上のことから、小学校低学年段階から比喩表現は直喩を中心として用いられていること、学年が上がるにつれて、擬人法や慣用句が増え、隠喩も数としては少ないながら、特に6年で増えることが明らかとなった。さらに、知覚的比喩が低学年から見られ、概念的比喩は中学年から出現していることも示された。あわせて、比喩の出現は「読み」の単元が主に担っている事も示され、次の平成30年度版教科書の分析に当たっては、「読み」に含まれる単元を対象とする事で、出現傾向を明らかにできる事が示された。

III. 教科書における比喩の出現傾向に関する検討

1. 目的

予備的検討の結果、比喩は「読み」単元を中心に出現しており、そこで使用されている比喩の出現数や種類を分類することで、6年間の傾向を明らかにできる事が示された。それを受けて、平成30 (2018) 年度版の教科書を対象に、改めて検討を行うこととした。なお、平成30年度版を対象としたのは、本検討を行う時点で入手できる最新版の教科書であったことによる。

2. 方法

(1) 分析対象：平成30年度版教科書を発行している全5社 (東京書籍、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書出版：教科書発行者番号順) の1年～6年 (全51冊) の「読み」(物語文・説明文・詩・その他) に該当する単元を集計対象とした。

(2) 分析手順：予備的検討で行った手順と同様で

ある。なお、知覚的比喩と概念的比喩については、予備的検討と同じく筆者ら2人が分類を行い、異なる分類結果の場合には協議して決定した。当初の一致率は98.9%であった。

3. 結果と考察

(1) 学年ごとの平均単元数：分析対象となった単元数を1社当たりの平均値(範囲)で見ると、1年は11.8(11~14)、2年は12.4(12~13)、3年は12.2(10~15)、4年は12.0(10~14)、5年は12.0(10~14)、6年は12.8(9~17)であった。出版社により幾分の違いはあるものの、ほぼ12単元前後で構成されていた。単元の種類の内訳も出版社により多少異なるが、物語文と説明文が多く、ほぼ、物語>説明>詩>その他となっていた。

(2) 「読み」単元に出現する比喩の学年による傾向：上記4つの「読み」単元について、出現比喩数を Fig. 1に示した。なお、比喩数を集計するに当たって、知覚的比喩と概念的比喩の両方にまたがっている比喩については、ここでは二重に数えずに集計した。全体の割合で見ると、比喩の72.1%は物語文で用いられており、次いで、説明文の12.0%、詩で10.0%、その他の単元で5.9%であった。比喩の理解は、ほとんどの場合、物語文で必要となることが窺えた。また、学年による変化を見ると、低学年から中学年にかけて出現数が増え、中学年から高学年にかけても増えている事が窺えた。指導を考えていく際には、こうした低学年、中学年、高学年の区切りを視野に入れる事も1つの考え方ではないかと思われた。

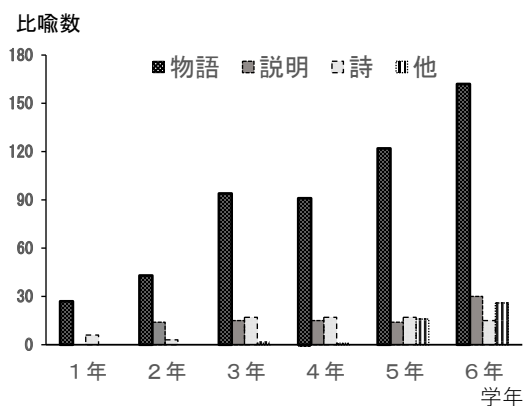


Fig. 1 「読み」単元における比喩の出現数

(3) 比喩の種類ごとに見た傾向：次に、比喩の種類ごとに出現数を集計した結果が Table 3である。な

お、ここでは、直喩、隠喩、擬人法、慣用句にまとめて、学年ごとの変化を示した。また、知覚的比喩と概念的比喩については、一旦それぞれに分けて集計している事から、Table 3に示す結果は、両者が重なって含まれている場合がある。集計結果から、直喩は低学年段階から見られ、中学年、高学年に進むにつれて出現数が増えていることが分かる。また、隠喩も数は少ないものの低学年でも使用例が見られ、特に中学年以降の使用例が増えることが分かる。同様の傾向は、擬人法や慣用句においても窺える。また、比喩の主なものには直喩であり、次いで慣用句が多いことが示された。隠喩と擬人法については全体のおよそ1割となっていた。表中には示さなかったが、知覚的比喩と概念的比喩の内訳について見ると、直喩の場合には、知覚的比喩が概念的比喩のおよそ2倍(311/165)であった。しかし、概念的比喩の数は、隠喩全体よりも多くなっており、直喩を扱うに当たっては、知覚的比喩と概念的比喩はいずれも指導の対象として考える必要があるといえる。隠喩においては、知覚的比喩と概念的比喩はほぼ半数となっていた。これについても、全体としての出現数は少ないものの、両者の指導を考える必要があると言える。これらの結果をまとめると、直喩>慣用句>隠喩>擬人法が比喩の出現傾向として窺え、これを手がかりとして系統的に指導するに当たっての順序を設定することができると考えられた。なお、谷本・金澤(2020)では、直喩と隠喩に関して、知覚的比喩と概念的比喩とに分けて指導順序を仮説的に提案したが、両者をまとめても順序には違いが見られなかった。

Table 3 比喩の種類ごとにみた学年による変化 (5社全体)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計(内訳%)
直喩	23	43	82	75	98	155	476(62.9)
隠喩	2	1	14	12	26	29	84(11.1)
擬人法	5	8	18	15	6	22	74(9.8)
慣用句	3	10	13	22	44	31	123(16.2)

(4) 光村図書出版における平成23年度版と平成30年度版の比較：今回、光村図書出版については2つの年度について検討を行った。両年度における比喩の出現傾向を見ると、いずれの年度も知覚的直喩>概念的直喩>擬人法>(または=)慣用句>知覚的隠喩>概念的隠喩となっており、出現傾向に大きな変化は認められなかった。上で述べた平成30年度版の5社全体の傾向とは幾分異なるが、これは、出版社によって採択

されている教材の内容の違いによるものと考えられる。いずれにしても、比喩の出現傾向については、過去8年間での大きな変化は見られていないことが推測された。このことから、指導の際の比喩の順序については、どの教科書を用いても、ある程度共通的に設定して差し支えないのではないかと推測された。

IV. 聴覚障害児童を対象とした比喩の系統的な指導のための教材の作成

1. 目的

上記の国語科教科書を対象とした比喩表現の出現傾向の分析を通して、比喩表現は、低学年から高学年にかけて増加していることが示された。低学年段階ではまだ多くの比喩が使用されているわけではないことも示されたが、そのことは低学年段階における比喩の学習が不要であることを意味しているわけではない。文部科学省(2018b)でも指摘されているように、高学年段階での比喩の学習を行うに当たっては、低学年段階からの基礎的な学習を進める必要がある。このことは、日本語習得に困難を示すことの多い聴覚障害児童においては特に必要になると言える。しかし、実際には、教科書で用いられている比喩表現に関して系統的に学習するための教材はこれまで見られていない。多くの言語事項を指導する必要があることもあり、比喩については、指導教材の一部を構成する場面が多くなっていることも考えられる。

そこで、小学校6年間の教科書の分析結果を踏まえ、聴覚障害児童を対象として、比喩学習を進めていくための教材(ワークブック)を作成することを目的とした。なお、ワークブック使用場面としては、「自立活動」の時間などにおける使用を想定した。

2. 方法

(1) ワークブックに取り入れる比喩表現の選定：上述のとおり、国語科教科書で用いられている比喩表現は直喩が最も多く、慣用句、擬人法、隠喩と続いていた。さらに、知覚的直喩が概念的直喩よりも多く出現していた。これを踏まえ、この順序に従って学習内容を構成することとした。しかし、その際に解決しなければならない問題がある。それは、直喩の表現形態(表現の仕方)がいくつか見られていることである。これらは、聞こえる児童であれば抵抗なく受け止められる表現と言えようが、聴覚障害児童の場合、同じ直喩表現にいくつかの異なる表現があること自体が、学習上の混乱を招く要因になるのではないかと推測された。すなわち、教科書で用いられている直喩表現の形

としては、「まるで～のようです・みたいです」、「まるで～のような(に)～」、「まるで～みたいな(に)～」、「～みたいです・みたいな」といったように、本来の比喩表現から、簡略化された表現までが存在する。これを踏まえ、本来の表現から簡略化された表現に至るまでの流れを含める形で、内容を構成することとした。また、擬人法については、本来隠喩に含まれる表現であり、たとえる時の言葉を使わない表現であることから、先に隠喩の概要について扱うこととし、その後「人にたとえるたとえ」として構成することとした。慣用句については、出現頻度も比較的高く、重要な指導領域ではあるが、特定の型を持たない表現であり、基本的には個別に意味を学習していく必要があることから、今回のワークブックに含めることは困難であった。そのため、慣用句については除外することとした。

(2) ワークブックの構成：まず、ワークブックは、低学年・中学年・高学年用の3冊に分けることとした。これは、比喩の出現傾向を見た際に、高学年にかけて段階があるように思われたためである。ただし、基本的な構成は、3冊で同じになるようにした。取り扱う比喩の順序は上述の通りとし、A4版用紙を横にして使用する形で、6～8のユニットで構成した。各ページの問題で使用する語にはイラストを付け、分かりやすくするようにした。イラストは、フリー素材を使用した。また、各学年段階の冊子に用いる問題文は、当該学年の教科書で使用されている比喩表現を参考に作成した。その際、教科書の表現をそのまま用いるのではなく、阪本(1984)に基づき、同学年段階の別の語彙に置き換えて作成した。

(3) 当初版の作成と改訂版の作成：当初版は、低学年用が16ページ、中学年用が18ページ、高学年用が16ページで、A4判用紙にカラーで両面印刷したものを作成した。ページ1枚の裏表で、1つの比喩表現についての作業を行うようにした。これについて、某特別支援学校(聴覚障害)で小学部を担当している3名の教師(低・中・高学年各1名)に、内容の構成、表現等について、留め置き法での意見聴取を行った。なお、調査実施にあたっては、広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会に申請し許可を得て行った。その結果、低学年で10件、中学年で5件、高学年で1件の改善意見が出された。著者らで協議し、改善意見を踏まえた改訂版を作成した。その結果、低学年用は36ページに、中学年用は33ページに、高学年用は35ページとなった。改訂版(中学年用)の構成内容を Table

Table 4 中学年用ワークブックの構成

学習1 「まるで～のよう・みたい」(知覚的直喩)	学習2 「～のよう・～みたい」(知覚的直喩)
学習3 「～ように・～みたいに」(知覚的直喩)	学習4 「～ように」(概念的直喩：様子)
学習5 「～のよう・～みたい」(概念的直喩：気持ち)	
学習6 「たとえることばをつかわないたとえ」(知覚的隠喩：状態)	
学習7 「たとえることばをつかわないたとえ」(概念的隠喩：気持ち)	
学習8 「人にたとえるたとえ」(擬人法)	力だめし(応用問題)

4に示す。低・高学年用と異なる部分もあるが、基本的にはいずれの冊子も同様の構成とした。各学習ページの構成内容(レイアウト)の概要は次の通りである。すなわち、①該当学年(氏名を記入する欄)、②学習内容(このページで学習する内容の説明)、③比喩の種類と該当する比喩が出てくる出版社と学年(教師用の情報)、④二択問題(絵で示したものの例：シャツの虹の模様)が、たとえに用いる2つの絵(炭と虹)のどちらに似ているかを選択する問題)、⑤書き込み問題(どこが似ているかを空欄に記入する問題)、⑥ここで学習する比喩の型(表現の仕方)についての説明、⑦⑥に該当するモデル文の提示、⑧比喩表現を空欄に記入する問題、⑨別の語と絵を用いて今日の比喩を振り返る問題(どこが似ているかを答える問題)、⑩応用問題を使って比喩表現を書く問題、である。なお、文等の表記に当たって、上の学年(中学年用であれば、4年)で学習する漢字にはふりがなを付け、巻末には解答ページを付けた。

3. まとめ

本研究では、国語教科書で用いられている多様な比喩表現について、まずは小学校段階で触れる内容について整理し、それを元に、比喩の意味や用法について、手順を追って学習を進めていくことを目指したワークブックを仮説的に作成した。今後の比喩指導のための1つの手がかりを得ることができたのではないかと考えるが、今回は、ワークブックの作成に留まり、実際に聴覚障害児童に適用した際の効果や不都合な点についての検討は、今後の課題として残された。聴覚障害児童にとって、読みの困難さを改善するために身につけなければならないことは比喩の理解だけではないが、実際の学習で使用する教科書を通して考えていくことにより、これまで指摘されてきた読みの困難さを改善していくための手がかりを得る1つの手段になるとともに、児童にとっては、教科書に書かれていることが少しでも抵抗なく読めるようになることで、言

語能力の育成を目指した学習活動に参加しやすくなっていくと言えよう。

謝辞

(1) 本研究の一部は、日本特殊教育学会第58回大会(2020福岡大会)において発表しました。本論文作成にあたり、その内容の一部を「日本特殊教育学会第58回大会論文集」より転載しました。転載にあたっては、一般社団法人日本特殊教育学会より転載のご承諾をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

(2) ワークブックの改訂版作成にあたり、ご多用の中、ご協力くださり、貴重なご意見を頂戴しました特別支援学校(聴覚障害)の先生方に厚くお礼申し上げます。

文献

- 我妻敏博(2003) 聴覚障害児の言語指導～実践のための基礎知識～. 田研出版.
- 井原栄治・草薙進郎・都築繁幸(1982) 聴覚障害児の語い・読み・作文指導. 明治図書.
- 経済協力開発機構(OECD)(2016) PISA2015年調査評価の枠組み－OECD生徒の学習到達度調査. 明石書店.
- 木島照夫・菅原仙子・岡野敦子(編著)(2011) 難聴児はどんなことで困るのか?－豊かな心とことばを育むために－. 難聴児支援教材研究会.
- 国立教育政策研究所(編)(2019) 生きるための知識と技能7 OECD生徒の学習到達度調査(PISA)2018年調査国際結果報告書. 明石書店.
- 前田 浩・堀谷留美・遠藤良博・太田 透(2017) みるみる日本語～みるくとするみの大航海～. 全国聴覚障害教職員協議会.
- 宮地 裕(1982) 慣用語の意味と用法. 明治書院.
- 初山洋介(1997) 慣用語の体系的分類－隠喩・換喩・

- 提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に一。名古屋大学国語国文学, 80, 29-41.
- 文部科学省 (2018a) 小学校学習指導要領 (平成29年告示)。東洋館出版社。
- 文部科学省 (2018b) 小学校学習指導要領解説国語編。東洋館出版社。
- 文部科学省 (2018c) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説総則編 (幼稚園部・小学部・中学部)。開隆堂。
- 中村 明 (1977) 比喩表現の理論と分類。国立国語研究所報告57。秀英出版。
- 奥田俊博 (2012) 小学校国語科における比喩表現の指導について。九州共立大学紀要, 2(2), 39-44.
- 阪本一郎 (1984) 新教育基本語彙。学芸図書。
- 坂本多朗 (2009) 永年聾学校にいた者からの『ほんのひとこと』—聾学校における授業改善の視点と方法—。聾教育研究会。
- 阪田雪子 (1990) 連語・慣用句。玉村文郎 (編), 講座日本語と日本語教育第7巻日本語の語彙・意味(下)。明治書院, 224-252.
- 佐久間淳一・加藤重広・町田隼 (2004) 言語学入門。研究社。
- 澤 隆史 (2004) きこえの障害と言語の発達—聴覚障害児の読み書き能力を巡る諸点と研究課題—。聴覚言語障害, 33(3), 127-134.
- 澤 隆史 (1999) 聴覚障害児の比喩の理解に関する実験的研究。風間書房。
- 銭 秀双 (2019) ことわざに見られる比喩の日中対照研究—植物の生長に関わることわざを考察対象として—。成蹊國文, 25, 52-67.
- 柴田奈美 (2003) 保育内容「言葉」から「国語」へ—児童文化財としての「お話」の教材研究(二)—。岡山県立大学短期大学部研究紀要, 10, 43-47.
- 杉本つとむ・岩淵 匡 (編著) (1990) 日本語学辞典。桜楓社。
- 谷本忠明・金澤知衿 (2020) 聴覚障害児に対する比喩の指導に関する基礎的検討 小学校国語科教科書における比喩の種類と出現頻度について。日本特殊教育学会第58回大会発表論文集, P2-27.
- 東京書籍編集部 (編) (2014) 慣用句・故事ことわざ・四字熟語使いさばき辞典。東京書籍。
- Trezek, B. J., Wang, Y., & Paul, P. V. (2011) Processes and components of reading. In M. Marshark & P. E. Spencer (Eds.), *The Oxford handbook of Deaf studies, language, and education. vol.1 2nd ed.*, Oxford University Press. New York, 99-114. 四日市市章・鄭仁豪・澤隆史(監訳) (2015) オックスフォード・ハンドブック デフ・スタディーズ ろう者の研究・言語・教育, 明石書店, 175-199.
- 脇中起世子 (2009) 聴覚障害教育これまでとこれから コミュニケーション論争・9歳の壁・障害認識を中心に。北大路書房。
- 呉 琳 (2016) 日本語の慣用句に関する研究の概観。日中語彙研究, 6, 87-105.
- 山梨正明 (1988) 比喩と理解 コレクション認知科学 5。東京大学出版会。
- 四日市市章(編著) (2009) リテラシーと聴覚障害。コレール社。
- 吉岡 豊・種村 純 (1998) 聴覚障害児における比喩文理解。川崎医療福祉学会誌, 8(1), 107-113.

(2021. 2. 1受理)

A Study of Systematic Instruction on the Figurative Expression to the Hearing-Impaired School Children Through the Examination of Types and Frequencies Appeared in the Japanese Language Official Textbooks from First to Sixth Grade

Chieri KANAZAWA

Tottori Prefectural Hakuto Special Needs Education School

Tadaaki TANIMOTO

Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University

For many pupils with hearing-impairment have difficulties of understanding the meaning of figurations. Many types of figurative expressions reveal in the Japanese language official textbooks used in the elementary schools in Japan. Acquiring the reading skills for understanding those expressions in the textbooks, systematic instructions are needed for the hearing-impaired pupils. In this study, we summarized the frequencies of figurative expressions according to the four kinds of figurations (simile, metaphor, anthropomorphic method, and idiom) in the Japanese language official textbooks (2018version) from first to sixth grade of all five publishers. As results, most used figurative was simile, followed by idiom, anthropomorphic method, and metaphor. Also, figurative expressions were increased from lower to higher grade. Similes and metaphors included perceptual figurations and conceptual figurations, and both of them were used in the textbooks. According to those results, we created the learning materials for the lower (first and second), middle (third and fourth), and higher (fifth and sixth) grades, which were aimed to systematic learning of figurative expressions. The contents were arranged in the order of perceptual simile, idioms, conceptual similes, perceptual metaphors, conceptual metaphors, anthropomorphic method. Idioms were deleted because there were many types and were not able to include in the one book material. Three learning book materials were checked by three teachers in the special needs school for the Deaf, but the verification of the effectiveness is the future issue.

Keywords: Hearing-impaired school children, Figurative expressions, Japanese language textbooks, Order of instruction, Figuration learning material

